

『美しい県土づくりNEWS』創刊100号に寄せて

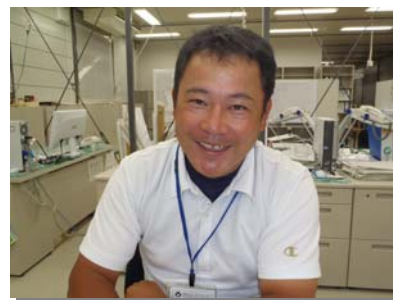
陸前高田市復興対策局 白澤 勉

平成16年の創刊当時、県土整備部県土整備企画室に在籍し、『美しい県土づくりNEWS』の初代担当である白澤勉さんに、「創刊100号に寄せて」と題して寄稿頂きました。

白澤さんは、東日本大震災津波発災直後から陸前高田市復興対策局に派遣されており、同市の復旧・復興に向けて最前線で活躍されています。

『美しい県土づくりNEWS』創刊100号、おめでとうございます。これまで途切れることなく継続して発行された担当者の皆様に敬意を表するとともに、『美しい県土づくりNEWS』をご愛読いただき、支えていただいた読者の皆様に改めまして感謝申し上げます。

さて、改めて創刊号を読み返しました。平成16年8月の創刊号の表紙は、遠野の田園を背景に一般国道283号仙人道路の工事現場の写真、そして「今月の人」では、当時の部長・橋本さんが寄稿しておりました。8年余りの時の流れを感じるとともに、県土整備部のこれまでの取組み、協働によるパートナーの皆様が浮かんで参りました。紙面で紹介している取組みは、ほんの一部ではありますが、改めて多様な仕事に取り組まれていると感心した次第です。



平成16年度当時、県土整備部に自主的な研究グループとして、維持管理部会、県民参加部会、コミュニケーション部会がありました。中でも県民参加部会やコミュニケーション部会では、職員の自発的な政策課題研究会の提言を生かし、より一層、現場において県民との協働が進むようにNPO等との協力・協働のシステムづくりを進めたほか、『美しい県土づくりNEWS』などを通じて、公共事業を県民の方に理解して頂くとともに、職員アンケートを受け、より有効なコミュニケーションの仕組みづくりを検討したことを思い出します。

今、私は陸前高田市復興対策局に配属され、昨年度は震災復興計画の策定や重点プロジェクトの植物工場の誘致に取り組んだほか、今年度は復興整備計画や防災集団移転事業の推進に携わっております。現場にいて思うことは、復興整備事業を行うにあたり、許認可手続きの緩和若しくは権限の付与がもっと現場に近い方に下りないものかと思えます。「復興なくして日本の再生なし」の想いで、いわば国家プロジェクト的な位置づけで、国・県・市町村・民間挙げて一日も早い復興事業を進めようとしている中、土地利用の手続きも抜本的に緩和できないものかと思えます。

最後に、今まさに、県土整備部の技術者魂が求められています。震災直後、道路も寸断され、水や電気、トイレも穴を掘って用を済ませていました。もちろん住む自宅ありません。我々県土整備部が携わっている社会資本の整備は、平時では当たり前利用していますが、震災を経て改めてその重要性を認識させられました。現場を動かす難しさは昔も今も変わりませんが、現場思考と行動力、顧客の笑顔を身近に感じることでできる県土整備部の大いなる潜在力を活かし、普通に暮らせる居住空間の再生、そして普通に過ごせるまちの再生、さらに未来につなぐ美しい県土づくりに向けて、シビルエンジニアとして引き続き邁進していきましょう。



写真：東日本大震災被災記録「陸前高田市」（復興庁岩手復興局）